

A-34

PICTURES OF A HEART



CHIKAJI KUGA

空閑知慈治著

大阪 大日本基督教幻燈傳道會出版

心

鏡

明治
41 4 9
丙交

紹介の辭

昔、イスラエルの神の幕屋に、銅の鏡を臺としてある、水を滿した銅の洗盤の設備があつた。それは、聖き神に近づかんとするもの、身を洗潔める爲で、其臺の鏡は、來つて身を洗はんとするものをして、自らの汚れたる實際の状態を認めしめ、而して、より深く洗潔めらるべき必要を感じしめたのであつた。

これは、靈と眞とを以て神を拜する現時代の豫表であつて、この意味を味へば、甚だ幽玄い教訓の存る事を覺ゆるのである。

人は誰も、心靈の潔からん事を願つてゐる。けれども、世には自らの汚れたる實際の状態を知らない爲に、潔に對ふ饑渴があまりに、痛切でない者が多い。もしまた、それを知つても、その汚れより洗潔めらるべき道を知らない爲に、徒らに藻掻き苦しんでゐる者も亦尠くない。

而し乍ら本書は、一方に於て、人の心靈の真相を照す神の聖言を以て、人の心の中に潜んでゐる罪の、如何に悪ましきものであるかを示す鏡となつて、一層深い饑渴を以て、潔を慕ふ心を興起さしめると共に、また一方に於ては、大能ある神の聖言を滿す洗盤となつてその汚を洗潔められる道を示してゐるのであるから、眞になやめる者に力を與へ、苦める者に慰安を與へ、聖きと義きとに於て、懼れなく世を送らしむる上に欠ぐ可からざる良書であることを信ずる。故に予は、世の多くの人が本書に來つて、先づ自らの真相を知ること共に、全く其心を洗潔められて、愛なる神に親む幸福なる生涯に入り、かくて永生を完うせられん事を切に望むものである。こゝに、聊か所感を陳べて、「心の鏡」を世に紹介する次第である。

大阪傳道館にて

明治四十一年三月

河邊 貞吉

再刊の序

教兄空閑君は快男兒なり。弱冠家郷を飛出して、放浪數年、備さに浮世の辛酸を嘗めつくしたる揚句、主イエスに救はれて信仰の道に入り、修養眷々、豊かに聖靈の果を結ぶ。資性直情熱誠、これを遣るに文筆を以てし、方に大に主の御用に立ちつゝあり。

教兄青木君も亦快男兒なり。身を手工家より起して傳道者となり、天稟の才辯全く潔められて、大日本基督教幻燈傳道會を主幹し、日本六十餘州を展にかけて、主の活ける奇跡を會衆の耳目に訴へ、大に御榮光を顯はしつゝあり。

二君曩に相謀りて「心の鏡」を發刊せしが、幾もなく初刊賣切れたり。機を見るに敏き青木君は、直に再版の議を立て、急々水の如く責に任するに忠かなる空閑君は、訂正の説を持して重々山に似たり。二君相會すれば問答先づこれに及ぶ。善青木君は「耳目傳道」の一日も緩うすべからざるの故を以て。又空閑君は傳道館の用務多忙にして、力を本書の訂正に專にする暇なきを以てなり。遂に御鉢は、當

時最閑散らしく見ゆる予に廻り來れり、乃ち空閑君、訂正の稿を艸して、予に拜見を仰せ付けらるゝなり。約既に成りて後、予も亦職を奉じて名古屋に趣くに及び、拜見意の如くならず。幸にして、空閑君の細心勉強、毫も予を煩はすに及ばずして、茲にめでたく再版の功を奏するを得て、序を予に徴す。乃ち内幕の事情を叙して序に代へ、且今更ながら、我が大阪傳道館多士濟々の中、特にこの二君を選びて、こゝに自らの御榮光を顯はさしめ給へる主を讚美するものなり。

名古屋金城女學校教室にて
生徒の自習を看まもりつゝ

明治四十一年二月下旬

工藤 玖三

自序

偶り多き致悪の世に、罪をまといて生れいで、虚しき榮譽にあこがれ、不義の快樂を慕ひ、而かも胸中何等の慰藉なく、常に煩悶と苦痛とになやまされ、遂に絶望の境に沈淪しぬたりし、われ罪人のかしら、焉んぞ人を教導するの資格あらんや。

遮莫、わが主、キリストイエスの贖ひによりて、驚くべき神の恩寵を辱したるもの、自らの愚なると、弱きと、賤きとの故を以て、衷情默する能はざるものありて存す。たましく、神は、大日本基督教幻燈傳道會主幹青木由太郎氏をして、傳道用の小冊子出版の事を志さしめ、氏を通して、予に「心の鏡」の起稿を命じ給へり。

於是乎、予の思想淺薄加ふるに文字に乏しきをかへりみず、修養の餘暇、筆を執りて本書を著し、昨年六月初版を世に公にしたり。

爾來、之れを反讀する毎に缺陷を見出し、切に改訂増補の必要を感じし折柄、主の御めぐみにより、再版發行の機に合せしを以て、尙ほ靜かに、祈りのうちに聖旨をうかがひ、慎みて改訂に従事し、主にある先輩諸氏の補導と、愛兄姉諸君の禱告とによりて、こゝに稿を脱するに至れり。

若夫れ、此小冊子にして、世の暗昧に彷徨へる人達に、真理の光明を示し、以て信仰に導くの業たるを得ば、是は唯だ、神の大なる恩寵と憐愍との故に外ならずして、眞に感謝にたへざる處のものなり。

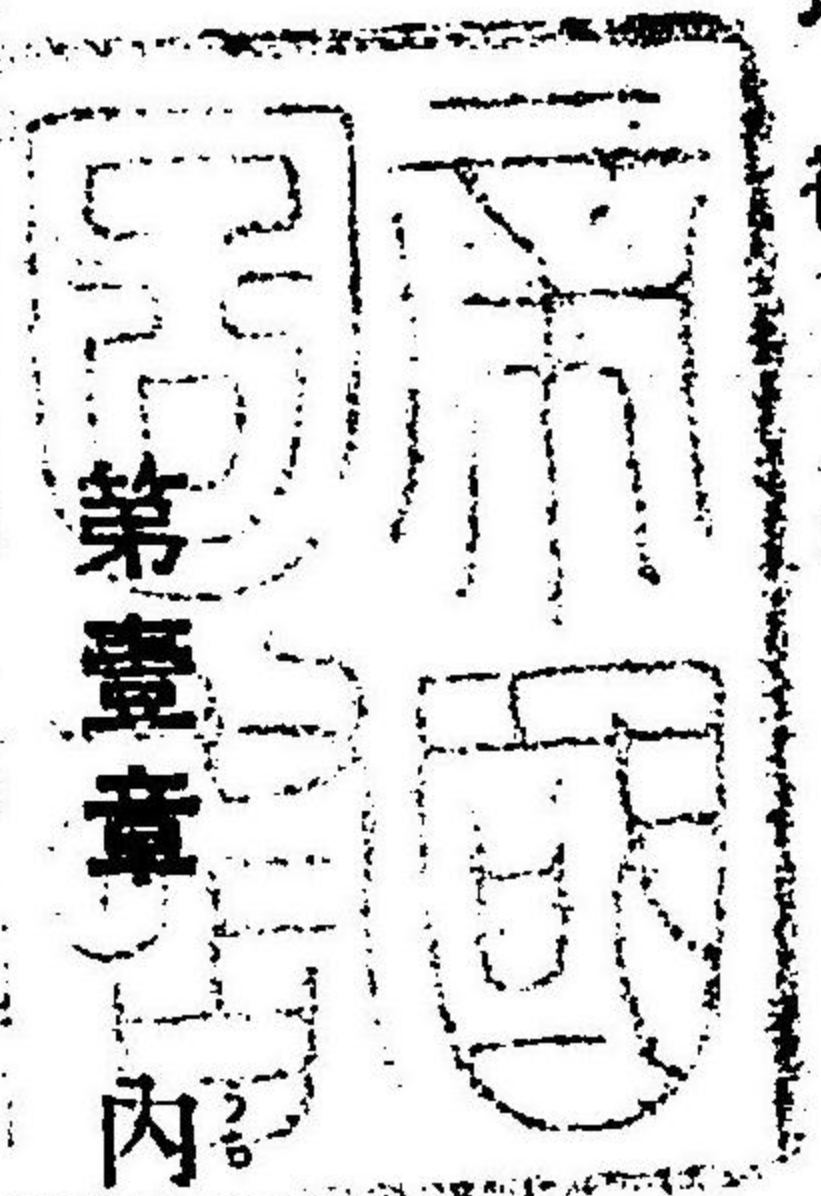
願はくば、凡ての榮光と讚美、今も後も、われらの主、イエスキリストに歸して、窮りながらん事を。

明治四十一年三月

著者

目 次	
第一章	内と外……………一
第二章	天と地……………七
第三章	心の影……………一四
第四章	罪の結果……………三二
第五章	十字架の教……………三七
第六章	聖靈の果……………五四
第七章	新天地……………六六

増改訂
補心と鏡



第一章 内と外

「爾曹の裝飾は髪を辨、金を掛、また衣を着るが如き外面の裝飾に非ず。たゞ心の内の隠れたる人、すなはち懐ることなき柔和、恬靜なる靈を以て裝飾とすべし、此靈の裝飾は神の前にて價貴きもの也」

よく人は「花の顔、月の眉……………」など、申しますが、それは皮一重の形容で。

第一章 内と外

心の鏡

まことに、

「人は外の貌を見、真神は心を見るなり」

と聖書に録されてある通り。

天地を見透し給ふ上帝は、人の心のすみぐくまぐくまでも御照覽遊ばしますから、たごひ、顔容は何んなに奇麗なにもせよ、心に少しでも罪に汚れた分子があるならば、上帝は其人を醜いものとして御取扱ひになります。

世には、わが顔の醜いのを頻りに悲しみ、少しでも美しく見せやうと、糠や石鹼やで研き立て、紅白粉を塗りつけ、衣裳髪飾等の流行を追う事に浮身をやつしても、大切な自分の心靈の状態に就ては、歪んで居れ、汚れて居れ、サツパリ無頓着な人が随分多う御座います。

ますかゝみ
うつるかたち
くらぶれば



みはぬ心の
はづかきかな
(古歌)

心の鏡

四

「朝には紅顔あつて世路に誇れども夕には白骨と爲つて郊原に朽つる」世のならひ、あはれ、露の命を塵の世に寄する人の、

「其榮華は凡て野の花の如し」

とは動かす可からざる眞理であります。

げに、草はかれ、花はしほむものと知つては、顔容の美醜等を問ふ

事の、あまり愚に感せられるではありませんか。

人は、互に欺き欺かれつゝ、明し暮した終が遂に悲むべき死に至る

のです。我儕は奈何して、それに満足する事が出来ませうか。縦し

三分五厘に世渡が出来るとしても、上帝の定め給うた法律により、

罪を犯した靈魂は永遠限りなき滅亡の刑罰に處せられねばなりません。

人間の良心は言はず語らずのうちに之を知つて居ますから、何

よりも死ぬる事を厭ふのであります。また、

「罪ある者には平安あることなし」

と聖書にある通り。現世に於て、何んなに名譽があつても、地位が

高くつても、學識に富んでゐても、財産が豊かでも、榮耀榮華を極

めてゐても、得たいと思ふ眞の安心は得られず、欲しいと思ふ眞の

喜樂は無く、思ひ煩つて、遂に自殺を企つるに至るものさへ御座い

ます。

處が茲に唯一の道として、何ういふ罪愆でも皆赦され、永遠限りな

き生命を受けて、現世から神の國の恩恵に充され、眞の安心と、眞

の喜樂との幸福な生涯を送り、「仰いで天に愧ぢず、俯して地に恥ぢ

ずといふ」心靈的、道德的、高尚純潔の人物と成る事が出来る處の

驚くべき、一大秘訣があるのです。是れは決して、空想でも迷信で

もなく、實際の事實であります。而かし、現世の名譽や、地位や、

學識や財産等で買ふ事の出来るものではありません。といつて、そんなに困難い事でもありません。されば、以下順を追うて此問題を研究して参りませう。

閑美歌一八八番

- 一 あだなる華の世にすめば おいもわかきもさだめなき
かぜにさらはれあるは散り あるはしばらくのこるなり
- 二 さきだちゆくもおくるも つひのすみかほうへもなき
あまつみくにか底もなき ほろびのふちかほかぞなき
- 三 やよ浮かれゆくたましひよ 汝があくがるるのはなを
さうひゆくべきやまかぜの あすをもまたで吹かぬかは
- 四 さらば人の子ころりて どこよのはるにちりもせず
いぼみもやらでさきにほふ みろの華をたづねみよ

第貳章 天と地

つらく考へて見まするのに、我儕幾億萬の人類は、各々その自由の意思に従つて、或は政治に或は宗教に、或は軍事に或は教育に、或は農業に工業商業に、將たまた文學技藝其他百般の事に當つて、身を勞し心を苦しめ、時には成功の喜に笑ひ、時には失敗の悲に泣き、宛然一場の狂言を見る心地がいたしますが、全體これらの人類は那邊から來て那邊に至るべきもので御座いませうか。この問題こそ眞の神を知り、人間の價値を曉り得る根本の問題であります。

試みに目を舉げて彼の大空を御覽なさい、晝は眩い計りの光を放つて、王者を装ふ太陽が堂々と輝いて居るし、夜は幾千萬とも數知れ

ない星が、満天に燦いて翠の帷張を彩つて居ます。廣々とした蒼穹のさま、其のうちに言ひ難き壯嚴の氣が充ち満ちて居るではありませんか。

視線を轉じて下界を眺むれば、鳥は嬌聲を弄して謳ひ翔けり、魚は沈黙を守つて楽しく遊び、虫や獸に至るまで各々その渴きをいやされて居ります。

野山は時に従つて美しい花、心地よい青葉、さてはまた錦ごまがふ紅葉もて奇麗に飾られ、田畑は折りくゝの稔豊かで、凡ての生あるものに一時も欠ぐ事の出来ない空氣は至る處に満ちてゐます。

雨は地を潤ほして五穀の生長を助け、清き流れをなして海にも入れば、また形を化へて空にも上り、潮の満干や四季の循環など、考へれば考へるほど、何一つ驚くべき現象でないものはありません。

かく不思議にも意匠精密、秩序整然たる此天地は、一体奈何して出来たのでせうか。或る學者達のいふやうに、單にある物質がその自然の法則に随つて、だんくゝと發展進化して来たといふばかりで御座いませうか。抑も之を創造り、之を統治め、之を進化發展せしむる處の、第一原因なる人格的實在者はありますまいか、我儕人間に良心を興へて「善を行ひ惡を避けよ」との道德法を立て、而して我儕人間が之れに従はざるに對して、正義しい黜陟を施す處の絶對的主宰者は無いのでせうか。我儕がなやめる時に人以上の扶助を興へ、我儕が迷へる時に人以上の指導を興へ、我儕が悲しめる時、我儕が失望せる時、我儕が逆境に處る時に、我儕に慰藉を興へ、望を與へ、同情を興へ、我儕が誤解せらるゝ時に、眞の知己となつて下さる處の、圓滿完全なる「天の父」てふものは無いのでせうか。果

して然りとせば、人間ほど、没趣味ものは無いではありませんか。されど有り難い事には、聖書の巻頭に、

『元始に神天地を創造り給へり』

と録されてあります。

さればこそ此の宇宙萬有は皆悉く、最初に全智全能なる眞の神様が創造されたので、われら人類は決して孤子でもなく、没趣味のもでもなく、神は我らの父、われらは神の子であるといふ事は、我らの感情をも理性をも満足せしめる事が出来るのであります。

故に我儕人間は此の神様を禮拜し真心より此の神様に従ひ、正義しい道を行んで此の神様を御よろこばせ申し、且つその聖榮光を顯すべきものであります。

然り、世の初めに神の像に象られて、人類の始祖、アダム、エバが

此の造物主に造られました時は、誠に罪もなく恥もなく、死もなければ恐もなく、エデンの園に於て此の慈愛深い天の父に恩寵され、偕に喜び樂しんで、萬物を治めてゐる事の出来る幸福な身の上でありました。處が一たび悪魔の誘惑に陥て、罪を犯しましてから始めて恥と恐とを覺ね、エデンの園から逐ひ出されて遂に死の刑罰を科せらるゝ事に決まつて了ひ、其後裔は凡て其罪の性質をうけついで全世界に蔓り、世は愈々姦惡の波漲つて、滔々として止まる處を知らない迄に墮落しました。のみならず人間は其造物主なる神様の在す事すら忘るゝやうになつて、却つて造られた人間や、日や月や、禽獸、昆虫、樹石、洞穴、木片、紙片、さては「鱒の頭も信心から」と云つて之を神とか佛とか名けて、伏し拜むやうに迷つてしまひました。何とあさましい事では御座いませんか。そもまた如何

心に尊敬すべき聖人君子でも、將た貴むべき一代の英雄豪傑でも、人間はどこまでも人間なので、同じ人間が之を禮拜したり、信仰したりするわけは御座いません。況して本体も知れぬ木佛金佛鳥虫などを拜み祭るに至つては、誠に愚昧の極と申さねばなりません。ある人はまた「自分はそんなものは拜んでゐない、自分の心が即ち神であり佛であるから、人は各々其良心に従つて行きさへすれば何も差支へは無いじやないか」と云つてゐるけれども、自分が自分に頼つて果して何の頼り甲斐になりませうぞ。故に我儕は一切此等の迷信から脱れて、肉眼には見ねど全宇宙に遍く在す獨一の天父、而かも斯く、智慧を權能と、恩寵と慈愛とに富み給ふ、活ける眞の神様の御存在を信じ、此の神様に復歸らねばならぬのであります。

もろくの天は 神の榮光をあらはし
 穹蒼 蒼蒼は 地のひてのわざを示す
 この日ことばを かの日につたへ
 このよ知識を かの夜にねくる
 語らず いはず 地の聲きこねざるに
 うのひびきは 全地にあまねく
 うのことばは 地のほてにまでおよぶ

めぐみのつゆは くさきにすら
 ゆたかにかゝり あまつさかぬ
 野にもやまにも みちわたるを
 などかひとのみ つみにらみ

第參章 心の影

我らは既に宇宙の本原に就て、また神と人との關係に就て、その一般を窺ひ知る事が出来ました、さてこれから我ら人間の心靈の狀態に就て、尙ほ深く考へて見たいと思ひます。

御存じの通り、當今は理化學が非常に發達しまして、電氣の作用で數百里外にある人の寫眞を取つたり、X光線の作用により、人の體を通して内部の様子を明らかに知る事が出来るやうになりました。これから益々學問の進むにつれて、どんな不思議な發明が出来て來かも知ません。が、それはホンの物質上のこと、申さば肉體の一部に係ることのみで、人の心靈のありさまを寫す事や、見る事は如何な電氣力でもX光線の力でも出来ないであります。而し乍ら神様

の聖言は、

『氣と魂、また筋節骨髓まで刺し割り、心の念と志意を鑑察ものなり』

とありますから、此聖言のするごき光の下に心をてらす淨玻璃の鏡に對しますならば如何に巧みにかくまつてある人の心も、忽ち其真相を現さずにおられませんか。私はこれから、其淨玻璃の鏡に照映つた真相を隠す所なく陳べやうと思ひます。

私はつらく之を打ち眺めましてその根ざす所が甚だ深く、その及ぶ所があまりにひろく、又あまりに悲惨な狀態であるのに驚きました。そしてあまた、び眼をつぶつては嘆息いたしましたのであります。私は、かゝる事を多く語りたくありません。けれども話の順序として、また事實は事實として、ありのままを陳べなければならぬの

であります。

(一) 貪慾

雅一〇十五

「慾すでに孕みて罪をうみ、罪すでに成りて死を生む」と聖書に録されてありますが、げに貪慾はご世に醜い罪はありませ

ん。出すことは懐裡の手を出すのも嫌、顛倒でも唯は起きぬ、といふ程の慾張でなくとも、大抵の罪は、この我利々々主義の貪慾から生み

出さるゝものであります。美服を着て膏梁を食たいとか、美しい妻を娶つて立派な宅に住みたいとか、ウンと金を儲けて子孫にのこしたいとか、高い地位に上つて此世の人に威張つて見たいとか、大人物大學者になつて後の世にまで鼻を高くしたいとか、いひつゞければ貪慾にも段々の差別こそ

約音二〇十六

あれ、畢竟此世に屬ける自己の肉体の慾、眼目の慾、權勢の慾、名譽の慾などを恣にしたいたい爲なので、それがためには假令、他人に何んな迷惑をかけても、家族の者を泣かしても、乃至は人に後指さされても、一切我不關焉で遣ツつけやうといふ恐ろしい根性が、いつも罪といふ罪の根本となつてゐるので御座います。

(二) 憤怒

ヤレ傭人が失錯をしたといつては怒り、人が自分を賞讃してくれないからといつては怒り、「彼の方は妾に同情して下さらぬ」といつては下女にあたり散らし、「彼奴は癩に障ることを云つた」といつては第三者に傍杖を喰はし、甚だしいのは人から自分の欠点を指摘して忠告せられたといつては怒り、自分の親切を受けてくれぬと云つては怒り、天氣が悪いといつては怒り、隣の赤兒が泣いたと云つて

心の鏡

一八

は怒る、眞に人は猫の尾にも似て、よく怒る動物であります。されど聖書に、人を怒る事は、人を殺す罪と同然である、と示されてあります。

げに、怒の結果は疾悪となり、疾悪の結果は咀咒となります。だから人は互に怒る事を慎むべきであるのに、生れつき、何かにつけてムツとし易いのは人間の弱点で、これを身を亡ぼし、家を失ひ、大にしては國と國との争を醸し、幾千万人の血を流すに至る根元であります。

誰か、生來、一たびも此の憤怒といふ罪を犯した経験が無いと斷言し得るでせう。

(三) 毀謗

人は兎角自分の過失を棚に上げて、他人の過失の棚卸したがるもの

であります。

だから他人に長所があつても、メツタに褒めません、たまさか賞めれば媚び阿諛の爲めで、實際に人の徳を立て其美を成すといふやうな、美はしい心はあまり起りません、俗に三人よれば姦しいといはるゝ無教育の女子は論外ですが、少し教育ある、謹慎深い紳士淑女といはるゝ人々は、マサカ表立て品なく人の悪口は言はないにしても、折にふれては人の批評もし、親しい同志の集ひには随分人の失策をほじくつて、如何はしい陰口をも敢てし易い傾向があります。總じて、人をそしる事は常に自らの品位を墜すのみならず、人と人との愛的關係を割き、又たさうでない人を傷つける事は夥多しいもので、聖き神様の御前には、勿論免る可からざる罪惡なのであります。

(四) 盜竊

固より刑法上の窃盜罪を犯した事のみを申すのではありません、たとひ刑法上の罪とならざる事でも、苟も我物ならざる物を我物として使用すれば、これは神様の前に盜竊となるのであります。例へば親の物を盗み、兄弟の物を盗み、乃至は人の目を盗み、マス、ハカリの目を盗み、時間を盗んだり、勞力を盗んだり、或は人の信用を恃んで其の保管物を流用したりして、心竊かにビク／＼しながら、適れ立派な潔白顔を装うて、大道を濶歩して居るものが澤山あります。すが、これとても天地を見透してゐ給ふ活ける神様の聖前に立ってまた自分の良心に對して、明白なる盜竊の罪を犯してゐるので御座います。

(五) 傲慢

「驕傲は滅亡に先だち、誇る心は傾跌に先だつ」

ある人は其容貌風采を自慢し、ある人は其の才智學問を鼻にかけ、或人は貧賤しき人を見下して、己が衣食住の贅澤を誇り、ある人は故らに質素を装ふて己が善行を吹聴し、又ある人は世渡りの巧妙をもつて高ぶり、或人は我膝未だ權門に屈せずと云つて誇る。特に彼の一藝一技の宗匠家元といはるゝ輩の、門下及び他流他派に對しての傲慢無禮に至つては傍で見ると嘔吐を催すばかりである、其他己の名自慢腕自慢、兄弟自慢、親自慢、家柄自慢、親類自慢、處自慢、國自慢、乃至信仰上の高慢など、數へ擧ぐれば澤山な驕傲の種類があります。が、之を要するに何人も先祖來の遺傳症となつてゐるところの、

「勢より起るたかぶり」てふ罪の素因をうけてゐるので、知らず識

らすのうちに傲慢となつてゐるので御座います。

(六) 姦淫

「婦と姦淫を行ふ者は智慧なきなり、之を行ふ者は己の靈魂を亡ぼし、傷と凌辱を受け、其恥を雪ぐ事能はず」

日本の法律では、只だ夫のある婦人と他の男子と密通したる場合を姦通として罰する位で、妻のある男子が他の夫なき婦人と不義を行ふ事や、又は未婚の男女が私かに恥かしい關係を結ぶ事などに就ては一向制裁が加へてありませんが、神様の聖語には

「凡そ婦人を見て色情を起す者は中心既に姦淫したる也」とありますから、勿論、男子を見て色情を起す婦人も同じく中心既に姦淫の罪を犯したのであります。

悲しいことには、我日本では古くから此姦淫罪といふ事に就ては觀

念甚だゾンザイで、罪を罪として恥ぢ、且つ懼れる念が眞に弱く、甚だしきは姦淫を一種の快楽や何かのやうに心得て、人も羨み自らも傲るといふ、奇怪な風習が或一部の階級に存在して居りますが、流石に良心の麻痺の未だ及ばない青年男女の心には、これら姦淫罪のいとも恥べく懼るべきものであると云ふ印象の明らかに刻まれてある事は、神様の大きな恩寵であります。然るに其良心の呵責を欺いたり、忍んだりして密に卑猥な文藝に耽つたり、不潔なる談話に夢中になつたりして、動機の上に恐ろしく又た惡むべき姦淫の罪を犯してゐるものは少くありません。況して動機の上を越えて、或は不自然な汚れた舉を敢てしたり、或は道ならぬ戀の辻に迷うたりして、遂に全く道義的觀念を失つた行爲に出る事など、人は若氣の至と見のがしも爲ませうが、取りかへしのつかぬ靈魂の沈淪を如何に

しませうぞ。

(七) 嫉妬

箴十四〇三十

『ねたみは骨の腐なり』

人の成功を羨んだり、人の立身を妬んだり、つまらぬ邪推から夫婦の間に面白からぬ風波を起したりする事は、凡て自ら發奮修整の元氣もなく、さればとて人の喜悦を我喜悦とする雅量もない、意氣地なしの性根玉の腐つた男女によくある事で、これ位いやしい、さもしい行爲は無いのであります。而してド、の結果は、

『癡き者は嫉妬の爲に己を死しむ』に至ります。

約百記五〇二

(八) 争鬭

犬も食はない夫婦の争ひから、血で血を洗ふ骨肉の争ひは勿論、チヨットした行きがりの口争ひから飛んでもない大騒ぎを演出すや

路十一〇十七

うな事も此世に少からないのであります、神様は争ふべからず、と仰せられますのに、これに恃つて人々互に相争ふは即ちこれ「畜生殘害の心」で神様の聖前に大なる罪なのであります。

『互に分争ふ國は亡び互に分争ふ家は傾るゝなり』

(九) 怠惰

世には随分、夫の留守に晝寝して肝腎の裁縫のわざはサテたき、臺所の始末すら怠りがちの無精な妻もあれば、又た妻兒ある身であり乍ら、定まつた自分の職業にさへ不忠實なところから、貧乏に追いつかれ、借金が積る世間に不義理が累る、遊んで儲ける分別に賭博をうてば運わるく負ける、自暴自棄で酒を飲む、酔狂して乱暴する妻は泣く兒は飢へる、新米の泥棒になつて、巡査に捕まる、とうとうたしまいに監獄行きといふやうな調子で、一瀉千里、色々な罪惡

を惹起す處の恐ろしい怠惰の罪は、警察の帳面の半以上を充して居ります。げに懦夫は心に慕へども得る事なくして、いつも不平や不満の絶え間なく、遂に天を恨み、世を怨んで一生を無頼漢に送り、此世では國家の厄介となり、後世には外の暗昧に追ひ出さるゝ他はありませぬ。

「惰者よ蟻にゆき其爲す處を觀て智慧を得よ、蟻は首領なく有司なく君王なけれども、夏のうちに食を備へ、收穫の時に糧を歛む、懦者よ汝何づれの時迄臥息むや何づれの時迄睡りて起さるや、暫らく臥し暫らく睡り手を又きて又た片時やすむ、さらば汝の貧窮は盜人の如く來たり、汝の缺乏は兵士の如く來るべし」

(十) 虚偽

「人は皆虚偽をもて其隣と相語り滑かなる唇と二心をもてものい

ふ

まこと、人間は表面と裏心とが、雪と炭とのやうに違つてゐるものであります。

例へば、折わるい來客に迷惑して、陰には箒を逆に立てながら、陽には惜氣もなく笑顔を傾けて、「相手欲しやの今日ぞ幸ひ何うぞ御ゆつくり遊ばして……」など御世辞を弄ぶのは常禮となつてゐる或は針小棒大のホラを吹き、或は心に狼の牙を磨しながら口には平和の僧衣を装ひ、或は家庭に散々不實を働いてゐる僻に、講壇に喋喋倫理を説くなど、甚だしきに至つては、

「虚言は日本の寶」と唱へ、或は「商賣と屏風は曲げねば立たぬ」と論じ、或は

「我ら舌をもて勝を得ん此口唇は我がものなり、誰か我らに主たら

んや」と全でウソ吐く事の巧みなのを誇り顔に、危く世の中を偽つて渡る人も尠くありません。

以上の如く、御互人間の心の醜體を昭々と眼前に照映されましたは罪の形式には輕重大小の差こそあれ苟も人間である以上は、たとひ如何なる人であつても、「げに然り、これ事實なり。我れまことに罪を犯せり」と、心に深く恥ぢる筈であります。

それでも尙ほ心を頑迷にして「手には、そんな罪は些ともない」と申されませうか。

『もし罪なしと言は、是れ自ら欺けるにて真理そのうちに在なし』と録されてあります。苟も一點の真理だに心に存してゐるならば、決して、そんな無茶な抗辯の言へやう筈はありません。殊に凡ての思念と行爲を悉く知つてゐる給ふ、全智全能なる神様の前に立つ

つみなりと

人にはいへど

ありぬへー



こゝろにとは

なにどこたへん

て、どこ迄も「罪なし」と強辯（ひん）ことが出来ませうか。
 縦（よ）しんば、前陳（ぜんちん）の罪（つみ）を一つも犯（な）した事（こと）がないとしても、これまで海（うみ）山の鴻恩（こうおん）をうけてゐる、天地萬有（てんちばんいう）の創造主（つくりぬし）にして、我儕（われら）をも造（つく）り、養（やしな）ひ、育（そだ）てたまひし天父（てんちち）なる神（かみ）を畏（おそ）れあがめず、これを拜（は）せず、これに感謝（かんしゃ）しないのみならず、聖（きよ）く義（た）しき神（かみ）をあなどりて、却（か）つて神（かみ）でもなき偶像（ぐうざう）を神（かみ）として、これにつかへるといふやうな、あらゆる罪（つみ）のうちで最も重大（じゆうたい）なる、また凡（たゞ）ての罪（つみ）の大根原（だいこんげん）である、「不信仰（ふしんかう）の罪（つみ）」は奈何（いかん）して免（のが）れる事（こと）が出来ませうか、於是（ゆ）乎（こゝ）聖書（せいしよ）に、

羅馬書三〇十

『天下（てんか）に義人（ぎじん）なし、一人（ひとり）もあるなし』
 と嚴（たゞ）かに断定（だんてい）を下（くだ）してあります。
 古來（こらい）、聖人賢人（せいじんけんじん）といはれた人は、孔子（こうし）、釋迦（しやくぢあ）、パウロ、ルーテルなどを始めとして、皆（みな）悉（ことごと）く自分の罪（つみ）を最も深く自覺（じかく）つたものでありま

す。この意味（いみ）からして最も明らかに自分の眞價（まゐら）即ち自分の罪（つみ）あることを覺（さ）つた人をこそ、聖人（せいじん）とも賢人（けんじん）ともいふのでありませう。俚（こゝろ）諺（ことわざ）に「臭（くさ）いもの身（み）知らず」といふ事（こと）がありますが、愚（ぐ）なもの程（ほど）、自分（おのれ）を賢（か）いと己惚（おぼ）て居（ゐ）るものです。

で、われらは神様（かみさま）の前にたかぶれる心（こころ）をすて、謙遜（けんそん）でありたいと思（おも）ひます。そして、「われはまことに罪人（つみびと）の首（かしら）白（しろ）く塗（ぬ）りたる墓（かぶ）の如（ごと）く外（そと）は美しく見（み）ゆれども、内（うち）はさまざまの汚穢（けがれ）に充（み）ち満（み）ちてゐるものである。」と、正直（しやうじき）に、神様（かみさま）の前に告白（こくはく）することが當然（たうぜん）と思（おも）ふのであります。

提前二〇十六
太廿四〇廿七

讚美歌二〇五番

(一) あゝ神（かみ）よみむねに　　うむきにうむき

この身（み）はみまへに　　いづるをうべきか

- (二) つみよりうまれて つみに犯ひたちぬ
御赦あらずば ぼろぶるほかなし
- (三) いためる業をも をりたまはぬ主よ
つみにほろびゆく 身をすくひたまへ
- (四) れもひ出るさへ 耻かき罪を
をかせるわが身は みさばきにたへず
- (五) をのゝきねりれて みまへにふす身に
のぞみのひかりを 主よてらしたまへ

第四章 罪の結果

知らざりし昔は兎も角も、斯くも醜き我心の真相を示れては、我乍ら殆んど愛想も盡きんばかりとなりました。サテ、此いやらしい罪

を犯した我儕の終末は如何なるでありますやう。
こゝに一の國があつて、之を統治めて居る國王あるとして考へませう。そして其國王が、其國の法律を犯した者を見のがしにするごしましたなら如何でせうか、遂に其威嚴は地に墜ち、其秩序は紊乱れて了うに達ひありません。

それと同様に、人間の良心に依つて辨へ知る事の出来る、神様の道徳法を破つた者を其儘不問に附しておかるとなら、神様の聖義公平な徳と、其榮光は顯れません。また此世の國王は如何に叡智聰明であつて、忠實敏達な有司をのみ用ゐてゐても、人間の力量には限りがあつて、行き届かない場合も多くあるために、往々法網を免れたり或は、時効によつて刑の執行を免れたりする罪人も出来ませうが「天網は恢々疎にして漏さず」といふやうに、全智全能にして全宇

宙を統治め給ふ所の、聖く義しき天の神様は、一点微塵の汚をも之を嫌ひ給ふので、老若男女の別なく、罪の軽重大小を問はず、一人も漏さずに、必らず之を公明正大に審判し給ふので御座います。勿論、現世に於ては、善人必らずしも榮へず、悪人必らずしも亡びず、是非善悪の應報完全からざるものあるのを見て、或人は輕卒にも「天道果して是非乎」と疑ふものもありませんが、

「あゝ、神の智と識の富は深い哉」

そこが人間の小智慧を以て、測り知る事の出来ない神様の奥妙なる御經倫のうちにあるので、即ち最後の審判の愈々正義しい事と、來世の如何に完全なるかを顯してゐるのであります。

聖書に、

「一度死ぬる事と死にて審判をうくる事とは人に定まれる事也」

と録されてありますが、晩かれ早かれ、我儕は現世を去つて、聖義公平な神様の臺前に立つて審判を受け、而して永遠限りなき生命の幸福を得るか、但しは永遠限りなき滅亡の災禍に陥るか、是非二つに一つの應報を受けねばならないのであります。

麥を播いて米を穫いる、事は出來ず、また米を播いて麥を穫いる、事は出來ないやうに、現世の生涯に於て「罪」を播いた人間が、來世に於て「善き報」の果を穫いる、事の出來ないのは當然であります。

無論是等の問題は、凡て永遠の元始より造物主の定め給うた法則として、明らかに聖書に示せる處でありますから、昨非今是の定まりなき此世の學説が、如何に小六ヶ敷理窟を逞ふして反對しましても此永遠に亘つて替る事のない眞理を托げる事は到底出來ません。

蓋聖書は、科學や哲學の上に權威を有つてゐるもので、哲學や科學も、此聖書に基いた宇宙の大真理に對しては、何處迄も口を噤まねばならないからであります。

されば、形を正して、神が聖書によりて明示してゐたまふ所を見たくあります

黙二十〇八

曰く、

「隠する者、信せざる者、憎むべき者、人を殺す者、奸淫を行ふもの、魔術をなすもの、偶像を拜する者、および凡て謊を言ふものは火と硫磺の燃る池にて其報を受べし、是第二の死なり」

と、この第二の死とは人間の靈魂が、永遠の苦痛を受けることを意味するのであります。

我らは既に斯く觀じ來つて、遂に、活ける神様の御存在につき、罪

- (一) たゞいきみかみの うのさばきに
 ながかたへうべき このつみびと
- (二) こよひにもねはる つゆのいのち
 たまひひのゆくゑ いづこにぞや
 げにもおろろいき わがゆくすゑ
 われなにをなさば すくはるべき

第五章 十字架の教

賽五十五〇一三

「噫なんぢら渴ける者ことごとく水にきたれ、金なき者もきたるべし、汝等きたりてかひ、求めてくらへ、來れ、金なく價なくして葡萄酒と乳(眞のよるこびと)を安(な)にかへ。なにゆる、糧にもあらぬ者のために金をいだし、他ことを得ざるものゝために勞するや、われ

につき審判につき、永遠の刑罰につき、又た自らに罪あること、あはれな立場に立つてゐる事を覺り、且つ、凡ての不平と煩悶と恐怖と疑惑とは、悉くこの罪に原因してゐたのであつた事を窺ひ知る事が出来ました。而して最早や此期に及んで、金の威光も偶像の利益も、名譽や學問の力も、乃至自己の決心や覺悟も、あらゆる難行苦業も、到底自分を罪より救ひ得る資格はないといふ結論に達しました。

そこで眞面目な世渡をせんとする人は、誰でも、あゝ『我れ救はれんために何をなすべき乎』と絶叫すにゐられないのであります。

(一) わがみのつみとが いかばかりぞ
みまへにあらはれ かくしもねず

に聴き従がへ、さらばなんぢら美物をくらふをね、脂をもて其靈魂をたのしめまするを得ん。耳をかたぶけ我に來りてきけ、汝等のたましひは活くべし』

オー讚めよ天地の主、能はざる所なき天父、恩寵と眞理とにみち給へる神様は、悔ひなやめる者の靈を活かし、饑渴くが如くに義を慕ふものを、飽たらしめ給ふ事が出来るのであります。

まことに神様は、その造り給へる森羅万象によつて、御自身の永能と、智慧と愛とを顯してゐ給ひますが、特別に、罪の爲に心靈の眼が暗んで、なやみと苦痛と、失望と落膽とに沈んでゐる我儕人間をあはれに思食して、その一人だにも沈淪る事を喜び給はず、凡ての人に希望の光明を示して、眞の歡喜と、眞の平安とを興へ、且つ永生を受けしめんがため、遂に御獨子イエス キリストを、此罪ふか

き世に降し給うて、御自身の御性質を具体的に顯され、剩へ、その測るべからざる宏大無邊の愛を、キリストの十字架によつて現し給ひました。

この故に、キリストも亦天父より遣されし使命を完うせられるために、十字架の苦みをも甘んじて受け給ひました。聖書に此消息を次の如く録してあります。

腓二〇五、六

「彼(キリスト)は神の體にて居りしかども、自ら其神と匹く在ころの事を棄難きことゝ意はず。反つて己を虚うし、僕の貌をとりて人の如くなれり、既に人の如き形状にて現れ、己を卑くし死に至るまで順ひ、十字架の死をさへ受くるに至れり」

何故に神の御獨子が、人となつてお降りにならねばなりませんか。

何故に神の御獨子が、十字架にかゝり給はねばなりませんか、こは我儕が犯した罪の爲であることを記憶たう御座います。

聖くして義しき神様は、どこ迄も罪を罰し給はねばなりません。罪人を其儘で赦し給ふことは、神様の義しい御性質として、どうしても出来ない事であります。それ故にキリストを罪人たる我儕人間の形状として此世界に降し、われらの罪の代償として、聞くも慘酷な十字架の上に其生命を失はしめ給ふたのであります。

オー悪ましきは罪であります。感すべきは神の愛です。キリストは那樣にして此世に來り、また那樣にして此世を去り給ひましたか。聖書の示すところを辿つて、今こゝに其一斑を陳べたいと思ひます。

キリストは、今を去る事一千九百有餘年前、パレスチナ(亞細亞大陸の西部、地中海の東岸)

の閑村ベツレヘムに於て、聖靈によりて妊める處女マリアより降臨
たまひました。

而して、資性柔和謙遜にして、凡て人の踐むべき道をふみ、守るべ
き律法に背かず。常に敬虔を以て、天父の聖意に適ふ事をのみ行は
れ。罪惡の中にて罪惡に染まず。殊に齡三十の時より、いよく
天父の愛の使命を成就せられるために、世の富も榮譽も、安樂も一
切をかへりみずして、其偉業に着手なされ、處々を歴廻り給ひては
「狐は穴より、天空の鳥は巢あり、然れど人の子は枕する處なし」
と仰せられる迄に、人としての艱難辛苦を備さに經驗せられつゝ、
人々に天父の御慈愛を説いて、罪の悔改を命じ、いつも御親切に、
「我を信せよ」
「我を信する者は死ぬるとも生くべし」

太八〇二十

約四〇二十一

約十一〇廿五

約六〇四十七

太十一〇廿八

「我を信する者は永生あり」
と宣ひて、自分を信仰するならば、靈魂は救はれて、永遠限りなき
生命を受ける事が出来ること教へられ、又た、
「凡て勞れたる者また重きを負る者我に來れ、我なんぢらを息ませ
ん」
と招きたまひ。且つ實際に、病める者を癒し、盲者の眼を開き、死
ねる者を甦らすなど、色々と不思議な愛の奇蹟を行はれて、まこと
に超自然の權能と、大なる榮光とを顯し給ひました。
故に聖書に、

「神のみち足れる徳（即ち智、能、聖、）は悉く形體をなしてキリストに住
めり」

と録されてある通り、主イエスの聖善なる御心情と、完全なる御品

性とは、遺憾なく天父の御姿を反射してゐましたから、眞面目な人たちはたゞく畏服感動するばかりでありました。

然るを何たる御いたましい事で御座いませう、主イエスは我儕の罪の爲に犠牲となつて、終に三十三の御時、彼のカルバリー山の上に於て、十字架に釘られ給ひました。

棘の冕を冠せられし御頭よりと、御手足の釘あとよりと、鮮血淋漓たる御苦痛の中にも、天父に祈りて、

「父よ彼等を赦し給へ、彼等その爲す所を知らざるが故也」

と、われら罪人のために禱告し給ひ、古今東西すべての人の罪惡を悉く御一身に引き受けて、至き贖罪を成し遂げられ、斯くして拯救の門を開き給うたので御座います。

これは紀元前七百十二年頃、預言者以賽亞が聖靈に感じて、

「彼（キリスト）は我儕の愆の爲に傷つけられ、我儕の不義の爲に碎かれ、自ら懲罰を受けて、我儕に平安を與ふ、其打れし痕によりて我儕は癒されたり」

と、預言したのが現實に成就したのであります。

私は、斯く主イエスが、我儕罪人の代償となつて下さつた事に就て感じた一の事實談を申し上げます。

兵庫縣のある村に、赤田某と云つて、木挽を業とする人があります。が、ある日の事、家後の山に行つて、大きな立木を鋸びきしてゐま

したが、アハヤ其木が倒れんとしかつた時、ト見る其の愛子が、其木の真下に當る處で、餘念なく遊んでゐる姿が、チラリと父の眼

に映りました、で、父は驚いて、「危い！」と叫ぶ暇もあわたくしく満身の力をこめて、今倒れかゝつた木に抱きついて、死にももの狂ひ

に、其倒れる方向を遮りました。が、無惨や、父は遂に其木の下にシカレて大重症をした。けれども幸に、其子の身には何の異状もな

くて、助かつたのであります。これはツイ先般、實際にあつた事件であります。此父は自分の可愛い息子を助ける爲に、斯く大重症を負るに至つたので子を思ふ親の愛は、かくも美しいものです。而し乍らそれにもまして、キリストは我儕の罪のため、我儕の不義のため、我儕が頭上に、やがて落ち来らんとしてゐた天の刑罰を御自身に引き受け、犠牲となつて十字架にかゝらせられ、完全き贖罪として、碎かれ、屠られ、御自身の受け給ひし刑罰によつて、我儕に眞の平安を與へ給ふ道をお開き下さつたのであります。十字架！ あゝ、もしも此十字架が無かつたならば、我儕は永遠の沈

淪より外は無いのであります。聖くして義しき神様は、此十字架の代償があればこそ、これによつて我儕の罪を赦し、我儕を神の子として永生を賜ふのであります。

かく、我儕のために、十字架上御いたはしき御最後を遂げさせ給ひし主イエスは、神様の権能によつて三日目に甦り給ひ、たしかなる証拠を以て、其弟子達に親しく御自身を顯され、四十日の間此世界に在して、終に多くの人の見てゐる前で、橄欖と名づくる山(エルサレ)の頂から、いと高き榮光の天に昇り給ひました。そして今、現に父なる神様の右に活存して、絶えず我儕人間の爲に禱告の祈をしてゐ給ふのであります。

故に。若し謙遜な心を以て、父なる神様の聖前に是迄の罪を悔改め而して主イエスキリストを自分の救主として信するならば、如何な

る人でも凡ての罪を赦されて、新生命をうけ、且つ聖霊の証によつて、自分にはたしかに神の子とせられたといふ自覚を與られます。そこで、眞のよろこびと眞の平安とは自ら満ち溢れて、いよいよ益々罪を惡み、義を慕ふ、神の子の義しい徳性があらはれて、漸々成長するに至るのであります。

これは、マジメに信じたものゝ、確實に實驗した神の靈能であつて決して一時の感情でもなく、迷信でもなく、妄想でもなく、また議論や理窟では到底打ち破る事の出来ない事實であります。

されば、救はるべき價値の無い、罪人の首なる著者でさへ、何の功績もなく、唯だ恩恵によつて救はれましたから、今や大膽に、こゝにキリストの活ける能を証明する事が出来るのであります。

神様は聖書に、これが唯一の救拯の道である事を斷定して、

あざけりて
 ほろぶる人の
 おほき世に



みちのひかりを
 あふぐかゝこと

(勇子女史作)

「此はか別に救あることなし」と示し給ひました。

かゝる大なる福音は、之を聞いても尙ほ且つ心を頑迷にし、あく迄も神様の憐憫を蔑視にして、好んで沈淪の道を辿りゆく人や、異端邪説を唱へ、世に俗化してゐる似而非信者の耳には、たとひ愚に聞えましても、我儕信する者には、神の靈能である事を讚美せずにはゐられません。

さらば此救は何時受くべきものでありませうか。

「なんぢら遇ふことを得る間に眞神を尋ねよ、近くゐたまふ間によびもとめよ。悪しきものはその途をすて、よこしまなる人はその思念をすて、眞神に反れ、さらば憐憫をほどこしたまはん、我儕の神にかへれ、豊かに救を與へたまはん」

あゝ諸君！ げに神様は、

「今は恩恵の時なり、今は救の日なり」

と仰せられましたから、たとひ、今爾の感情は動きませんが、神様は言ひ難き御歎きを以て、爾と早く判然とした親子の関係を結びたく思食して、爾がキリストの功績によりすがつて、立ちかへりなされる事を待つてゐたまひますから、爾も此愛の聖旨に逆らはず、心をひるがへして、何卒今、天父の聖前に、謙遜つた、柔順い、痛悔心を以て、従來の不義罪惡を悉く悔改め、主イエスキリストを信じ、身も靈も全く此御方に御任せなされる決心を爲て、今そこに俯伏して、眼を閉ぢて、静かに、「天の父よ、主イエスの身代によつて私の罪をお救し下さい」と、心を見たまふ神様の前に、聲を出して願ひ求め、心の秘密をスツカリ打ちあけ、これからの生涯は神様の御

めぐみにより、ごこ迄も聖く義しく送らせていたゞきたいとの、深い願をも言ひあらはし、謙り下つて御祈なさい。斯くて十字架の上に生命を捨て給ひしイエスが、自分の救主である事をふかく信じ、甦りて禱告してゐたまふキリストを見上げて俟望みなさいますとき、爾の心のうちに静かに、

大九〇二

『子よ心安かれ、爾の罪赦されたり』
 どの、神様のあはれみの御聲が默示されます。これを聖靈の証と申します。

神様はたしかに赦し給ふと信じて祈り、その証の來るまで一瞬間なり、數分間なり、静かにお俟ちのぞみなさい。

この、証を握つた一轉機こそ、爾は、爾が犯した凡ての罪愆を赦されて、新生命と神の子たるの權能を與へられ、永遠の沈淪より免れ

て、永生にうつされたのであります。さればまた之を「更生」の恵とも申すのであります。

かくて爾は、祈禱によつて常も天父なる神様と自由に交り、絶えず慰安と喜樂とを上より受け、聖書によつて愈々主イエスの御慈愛を曉得り、其愛に感じて人々に接し、日々活ける希望に充たされて、幸福な、生甲斐のある生涯をお送りなさるのみならず、來世に於ては、彼の美しい天國において、永遠神様の御祝福をお受けなさる事の出來る、誠にさいはひな者とおなりなさるのであります。

讚美歌一七五番

一、勞れたるものよ われにきたり

重荷を罷ろして とくやすめと

まねく主の聲に またがひゆき

やすびき安息を うるうれしさ

二、温きたるものよ わがあたふる

生命のまみづを きたりのゆと

まねく主の聲に またがひゆき

拯救のいづみを くむうれしさ

三、暗きにすむもの われのてらす

まことの光を あふぎ見よと

まねく主の聲に またがひゆき

神のまさみちを ふむうれしさ

第六章 聖霊の果

本章及び次章は、既に救はれてゐる基督信者であつて、更にまさりたる信仰の経験に入らんと欲せられる御方のために、至極大切な問題を、御参考とまで、記したものでありますから、未だ信者でない御方は、よろしく、

前章の「更生」を御実験なさつた後、祈りのうちに之れをお讀みなさい。然らば神は、聖霊の光によつて、其の深意を靜かに示し給ひます。

凡そ基督信者の生涯は幸福な生涯であります。而し乍ら、犯した罪を赦されて、「更生」を實驗した丈けでは、純粹の聖徒とは申されません。又た眞個の幸福な生涯とも申されません。何となれば、人間は犯した罪の外に「生れつきの罪」——又は「舊き人」ともいふ——即ち、遺傳によつて祖先から承継いた「罪を犯し易い肉の性質」を有つてゐますので、之を根本から取り去られ、聖潔められてゐませんならば、眞の自由が無いからであります。彼の、大聖人といはるゝ使徒パウロも、キリストによつて更生つた後の経験を認して、

「われ願ふ所の善は之を行はず、反つて願はざる所の悪は之を行へ

り。若われ願はざる所を行ふときは、之を行ふ者は我に非ず、我に居るところの罪なり。是故に我善を行はんと欲ふときに、惡の我にをる此一の法あるを覺ゆ。蓋われ内なる人に就ては神の律法を樂めども、わが肢体に他の法ありて、我心の法と戦ひ、我を擧にして我が肢体の中にをる罪の法に従はするを悟れり。噫われ困苦人なる哉、この死の體より我を救はん者は誰ぞや」と、叫びました。

これは從來の罪惡を悔改めてキリストを信じ、かくて義とせられ、神の子とせられし、自覺をもつてゐる、眞面目な信者には、誰にも來る經驗であります。まことに、神に因つて生れた者の裏にある「新しき人」は、切に義を慕ひ、聖きを愛する性質をもつてゐます。けれども各々がもつて

生れた「舊き人」は、常に罪に傾き、神に逆らう性質をもつてゐますから、たとひ表面は誠に行爲の正しい、熱心な信者のやうに見えてゐましても、其心の状態は、始終戦ひの絶間なく、神のみアガメたくても、何だかそこに妨げがあり、また人を愛したくても、却つて之を憎む事があり、或は不潔な念に驅られて悔改め、悔改めはまた罪を犯すなど、上つたり下つたり、信仰の動搖が甚だしうてこれがために他人を躓かせ、又は自ら煩悶するやうな境遇に陥るものも尠くありません。

されど、我儕の主イエスキリストは完全なる救主であります。決して、ある程度迄は救うても、ある範圍には及ぶ事の出來ないといふやうな、能力の限らるべき救主ではありません。故に我儕に「完全き救」を與ふるものは、

羅七〇廿五

創三〇十五

路一〇七十五

「是われらの主イエスキリストなるが故に神に感謝す」と、我儕はパウロと共に讚美したう御座います。

一度、十字架の上に生命をすて、悪魔の頭を打ち碎き、榮光の權威を以て、死と陰府とに勝つて甦り、今、威光ある天父の右に活いて、我儕のために禱告し給へる主イエスは、我儕の罪惡を赦し、我儕の病患を癒し、我儕の肉体を甦らせ得る、權能のある事は勿論。

我儕を自己中心なる「肉の性質」より全く聖潔め、我儕に聖靈を與へて、其眞の自由により、聖と義に於て懼なく神の聖意を行はしめ且つ完全なる永遠の救を、我儕の上に成就して下さる靈能があつて優に餘りあり給ふのであります。

故に、我儕は、第一の恩恵なる「更生」を實驗した丈で満足せずより深き饑渴きを以て、此の第二の恩寵なる「聖潔」を求めなければなりません。

弗一〇四

多二〇十四

來十二十四

黙二十一〇廿七
羅八〇七

彼前一〇十六

撒前四〇三

殊に、我儕を聖潔めたまふ事が神の永遠からの御計畫であり。イエスキリストの贖罪の御目的であり。また我儕が、イエスキリストに見ゆる唯一の條件である事を知るとき。そして凡て潔からざる者は天國に入るを得ずとの御言葉を聞き。肉の性質は神の敵である事をさとす。且つ、

「我潔ければ爾曹も潔くあるべし」と、嚴肅に命じ給ふ神の聖聲に接し。また、

「神の旨は爾曹の潔き事」と、囁いてる給ふ聖靈の切なる願を思ふとき。我儕はどうしても、聖潔めらるべき必要を感じるではありませんか。

然り、而し乍ら、己の熱心や、己の氣力を以て得られるもので

はありません。けれども幸な事には、神様が、こゝにまた驚くべき御恩寵の約束を示し給うて、

利廿〇八

『我はエホバにして爾曹を聖潔むるものなり』

と仰せられ、何等の功績なくして、此聖言を我儕の上に成就して下さるのであります。

路廿四〇四十九

甦り給ひし主イエスも、次の聖言を遺して昇天なさいました。

『我わが父の誓のもの（聖霊）を爾曹に遣らん、爾曹上より權を授けらるゝ迄はエルサレムに留まれ』

と、此約束は五旬節の日より、つゞいて今日まで信する者の上に成就してまゐりました。そは録して、

徒二〇卅八、卅九

『爾曹も聖霊の賜を受くべし。この約束は爾曹および爾曹の子孫、また凡ての遠人すなはち主たる我儕の神に召さるゝ人々に属くな

り』

とあることの、偽りならぬ事を証拠立てゝ居るのであります。然らば何によつて此恩恵が来りますか、即ち聖書に、

來九〇十四

『……況して永遠靈により、瑕なくして己を神に献げしキリストの血は、爾曹に活神を奉事せんがため、死の行を去しめて、其心を潔むる事を爲ざらん乎』

と、録されてあります。

されば君よ、オー愛する兄弟姉妹よ、何卒今謙遜つて、誠心より切に此まされる恩恵を求めなさい。

紋の歌廿一の一節

イエスよみまへにふすわが
つみにうまれゝこゝろと
けがれにうみゝこのみを

貴き血もてきよくせよ
(返折) 主よわれをあらひて
ゆきよりもくろくなせよ

而しこゝに、忘れてはならない二三の要件があります。それは、此聖潔の恵みは、更生の實驗を掘つてゐる、神の子とせられた者丈に對する恩寵であるといふ事と、此恩寵を受けらるるためには、自分のうちに、生れつきの罪のあることを認め、之を認はすと共に、自分自らの身と靈を、全く神様に献げ、そして神の聖旨のみを行ひ、神に絶對の服従をする決心をなし、これを神に告げ奉り、我を聖潔めて聖靈を與へ給へと祈り、信仰を以て、靜かに俟望む事でありませう。全く従ふ決心が出来、明確に献身を致しまして、此世の何物を捨て、聖潔められて、聖靈を受けねばならぬとの願が、神様に見わた

弗二〇三
約壹一〇九
羅十二〇一

約壹一〇七

徒二〇四

救の歌
廿二の五節

加五〇廿二三

とき、此恩恵は間違なく、爾に來り、
『イエスキリストの血、すべて罪より我を潔む』
との實驗に入り。
『聖靈に満たされたり』
と感謝なすることが出来るのであります。

主のいさほにより
くだる聖靈は
われをもみたますと
いまこゝろ信せめ
(返折) みたすみたま いま主はわれに
またしくのぞみて みたまたまへり

是に於て聖靈は爾の衷を占領なし給うて、豊かに、仁愛、喜樂、平
第六章 聖靈の果
六三

花のれも

かすみのそでも

なにかせん



心のいき

神やめづらむ

(勇子女史作)

和、忍耐、慈悲、良善、忠信、溫柔、持節』などの果を結ばせ、且つ永生を完全うして下さるのであります。

聖書に

哥後三〇十七、十八

『主の靈ある所には自由あり。凡て我儕帽子なくして鏡に照すが如く主の榮を見、榮に榮わいや増りて其おなじ像に化る也』と、録されてある通り、かく主の聖靈に盈満されましたものは、患難にも、困苦にも、迫害にも、飢饉にも、裸體にも、危険にも、刀劍にも、いひ難き感謝と讚美のうちに、勝ち得て餘りある生涯を送る事が出来ますので、聖い神様の御前にも、また人の前にも一点微塵の恥かしき部分なく、榮に榮わいやまさりて、主と同じ像に化せられつゝ、身に於ても靈に於ても、造物主の御榮光を顯し得る聖徒の生涯こそ、如何にまさりたる幸福な生涯ではありませんか。

(一) 主の血のいづみは ぶかくひろく
すくひのみちから ほむべきかな

をオーほめよたへよ
へかり
主イエスの血は
すべてのつみより
われをさへきよむ

(二) つみの世にかちて きよくあゆむ
このみはときばに 主のみやなり

(三) わが主イエスを みのうれしさ
あまつよろこびに 日々みたま

第七章 新天地

讀者諸君、主イエスは御自身の寶血を以て、我儕信する者の罪を完

全く贖ひ、且これを潔めて天國の民となし給ひました。けれども、
主の御恩寵は雷にこれのみにとまりません、尙大なる幸福を我儕
に與へたう思食して、其御在世中に、

約十四〇二三

「わが父の家には第宅たほし、然らずば我豫て爾曹に之を告ぐべき
なり、我爾曹の爲に所を備に往く、若往きて我爾曹の爲に所を備
ば、またきたりて爾曹を我に納べし、我居る所に爾曹をも居らし
めんとてなり」
と、御みづから宣給ひました、又天の使は主の昇天の際人々に對つ
て、

徒一〇十一

「人よ、何故に天を仰ぎて立てるや、爾曹を離れて天に擧げられし
此イエスは爾曹が彼の天に昇るを見たる其如く、またきたらん」
と、曰つて主の再臨を証明しました。使徒も亦聖靈によつて屢々主

第七章 新天地

撒前四〇十六、十七

の再臨に就て預言しましたが殊にテサロニケの書に、
「それ主號令と使長の聲と神の籤を以て自ら天より降らん、其時キリストに在て死にし者先に甦へり後に活て存る我儕、かれらと偕に雲に携へられ、空中に於て主に遇ふべし、斯て、我儕いつまでも主と偕に居らん」
と、判然録されてあります。

弗五〇卅二

黙十九〇七

教會の新郎なる主イエスが、其新婦なる教會(聖書に、キリストと教會との關係を(聖書に、キリストと新婦との關係になぞらへて)を迎へんために、空中まで再臨給ふ時は、やがて彼の最も榮ある「羔の婚姻」の始まる時であります。こは、主の新婦たるにふさはしき教會をかたちづくれる聖徒各々にとつては、無上の幸福な時であります。不信者は勿論、たとひ信者であつても、主の再臨を閑問題として疎外してゐる人や、聖潔められてゐないものは此地上

太二十四〇二十一

路二十一〇三十六

に残されて、恐るべき災禍に遇はなければなりません。戦争、饑饉疫病、迫害、地震は相繼で起り、日月星辰にも大なる變化を生じて非常なる患難が参ります。主イエスはこの事を預言して、
「其時大なる患難あり、此の如き患難は世の始より今に到るまであらざりき、又後にもあらじ」
と、仰せ給ひ、且つ、

「此故に爾曹醒て此臨まんとする凡てのことを避け、また人の子(キリスト)の前に立ち得るやうに常に祈れ」

と、ねんごろに警戒め給ひました。

如斯、地上には恐ろしい患難のある間に、主の再臨を慕ひ俟望んでゐた聖徒等は、空中に於て榮ある「羔の婚姻」に與かり、無上の光榮、最高の幸福を受くるのであります。今までは、夢になりと、幻

になりと、逢ひ奉らまほしくのみ思ひ焦れし、懐かしの主イエスと顔と顔を合せて相見え、地上に於て聖名のために竭せし勞苦の報賞を、親しく其聖手より受けて、言ひ難く且榮ある喜樂に充さるゝのは此時であります。

この後主は、王の王、主の主として、諸々の天の使を引率て此地上に顯現れ給ひ、茲に「千年王國」を始め給ひます、その時聖徒等は主と共に榮の中に顯れて、千年王國の榮に與ります。此王國の幸福なる有様に就ては聖書の中に多く録されてありますが。殊に、以賽亞の書に於て、

『おほかみは小羊とともにやどり、豹は小山羊と共にふし犢をじし肥たる家畜ともに居てちいさき童子にみちびかれ。牝牛と熊とはくひものを同じし、熊の子と牛の子と共にふし、獅子はうしの如

く藁をくらひ、乳兒は毒蛇のほらにたはむれ、乳ばなれの兒は手をまむしの穴にいれん、斯てわが聖山のいづこにても害ふことな
く傷ることなからん。そは水の海をたほへるごとくエホバ（神）
をしるの智識地にみつべければなり』

と、録されてあります。

これは即ち「黄金時代」であります。黄金時代は文明開化に由つて得られるものではありません。また人間の工夫に由つて建設されるものでもありません。黄金時代は主イエスが再び此地上に顯れ給ふ事に由つて得られるのであります。

千年王國の終に『白き大なる寶座』が設けられて、其上に神様が座し給ひます。其時に、主に由つて潔められずして世を去つた全世界の人間は甦ります。貴賤貧富、老幼男女の區別なく、世の始より世

の終に至る迄の凡ての人間は甦りて、生れ出で、より眠に就く迄の現世の生涯の行爲に准つて、神様の大審判を受けます。而して、主を信じて生命の書に其名の録されてゐない人々は、惡魔と惡魔の使等の居る、火と硫磺の燃ゆる地獄の池に投込まれます。是に於て、主は新天新地を創造り給ひます。

「われ新しき天と新しき地を見たり、先の天と先の地は既に過ぎり海も亦有ることなし。われ聖城なる新しきエルサレム備整ひ神の所を出て天より降るを見る、その状は新婦その新郎を迎へん爲に修飾たるが如し。われ大なる聲の天より出づるを聞けり、云く神の幕屋人の間にあり、神人と共に住み、人神の民となり、神また人と共に在して其神と爲り給ふなり、神かれらの目の涙を悉く拭

とり復死あらず、哀しみ哭き痛み有ることなし、蓋前の事すでに過去ばなり、寶座に座する者われに曰けるは、見よ我れ萬物を新にせん、又我に曰けるは、爾これを書記せ蓋この言は信す可して確實なればなり」

と、聖靈によつて録さしめられました。

あゝ新天新地よ、涙なく死もなき新しきエルサレムよ、榮光と祝福に充る神の幕屋よ、これは我儕の永遠の住居であります。

人間の始祖のアダムは罪のためにエデンの園を失ひました。けれども神様は第二のアダムなる主イエスに由て、エデンの園よりも更に幸なる、更に榮ある新しき天地を創造り給ひます。

あゝ、罪の爲に身も靈も汚れ果てし我儕を、何の功もなきに、唯だ十字架の寶血に由て救ひ給ひ、且つ此の豊かなる祝福に與らせ給ふ

は、何と驚くべき神の愛、測るべからざる神の智慧ではありませんか。

もし一たび靈の眼が開かれて、罪の如何に悪むべきものであるか、眞理に逆ふ不信者の、如何にあはれなる末路に陥るかを示され、また、義の如何に慕ふべきものであるか、眞理に循ふ信者の、如何に光榮ある最後の勝利を得るかを示されましたならば、誰でも悚然として罪を捨て、全く世と肉に属けることより超離れて、天と靈に属けることを求め、外面の裝飾よりも心靈の裝飾を貴び、聖潔き生涯を送つて、只管に主イエスの御再臨を慕ひ俟望むやうになるべきであります。

哈二〇三

「此默示は、なほ定まれる時を俟て其終を急ぐなり、偽りならず、若し遅くあらば待つべし、必らず臨むべし、滯滞りはせじ」

黙廿二〇廿

同前

「我れ必らず速かに至らん」

「アメン 主イエスよ來り給へ」

救の歌四六番

(一) いつ主はきたりたまふや たれもいらねげ

われらはたはらずめさめ まもるべきにぞ

身もたまもたもひをも みなきよめられ

(返折) 主をまちのぞむものは いとうるはしきかな

(二) もこのまくにわれら 主にめされなほ

たつをうべきか

(三) きよめられたまらんと ころをあらはせ

主をまちのぞまん

(四) われすみやかにいとらん ハレルヤアーメン

主イエスよきたりたまへ ハレルヤアーメン

終りに臨んで、讀者諸兄弟の上に、神の御祝福の豊かならん事を祈る。アーメン

心の鏡 終

明治四十年六月七日印刷
明治四十年六月十二日發行
明治四十一年四月六日改訂再版發行

(定價金七錢)

著者

空閑知鷺治

發行者

青木由太郎

印刷者

田中辰之助

印刷所

全上二百五十三番屋敷
龍文舎

發行所

大阪南區難波元町
難波傳道館内

大日本基督教幻燈傳道會

大賣捌所

大阪東區南久太郎
町四丁目心齋橋筋

福音社書店

終りに臨んで、讀者諸兄姉の上に、神の御祝福の豊かならん事を祈る。アーメン

心の鏡 終

明治四十年六月七日印刷
明治四十年六月十二日發行
明治四十一年四月六日改訂再版發行

(定價金七錢)

著者

空閑知鴛治

發行者

大阪市南區難波元町五丁目
五百四十一番地ノ五
青木由太郎

印刷者

大阪市南區高津町九番丁
二百五十二番屋敷

田中辰之助

印刷所

全上二百五十三番屋敷
龍文舎

發行所

大阪南區難波元町
難波傳道館内

大日本基督教幻燈傳道會

大賣捌所

大阪東區南久太郎
町四丁目心齋橋筋

福音社書店

大日本基督教傳道會
發行書目

福音畫報 定價金五錢 郵税金貳錢

日曜學校生徒の少女が其純清なる信仰によりて、大酒放蕩なる父を悔改めに導きたる事實を、一冊の寫眞畫帖となせしもの眞に美しき書にして、日曜學校の參考書家庭の讀物、又は贈り物として、最も適當なり。

讚美唱歌 定價金貳錢 郵税金貳錢

少年少女諸君に適せる優美なるもの、活潑なるものを編纂しました、さーくみなさん一冊求めて歌ひなさいませ！

この日も 日曜世界 毎月一回 二十五日發行 定價壹部參錢五厘(郵稅共)

『日曜世界』はキリストによれる喜の音づれを、その最愛したまふ兒童たちに傳播めるために、昨年のクリスマスに此地上に遣はされました。

『日曜世界』は小さい天の使です。花にすれば華、鳥にすれば雀、人にすれば

小児のやうな至つて仇氣ない雜誌で、いつもにこく笑つて、面白く歌つて、楽しく躍

神をほめたへてをります。

『日曜世界』はごこを訪れましたか、先づ多くの日曜學校をはじめ、こどもの親たちを訪れました。そしてごこでもかしこでも「よく來たく」といつて歓迎せられました。

『日曜世界』はいつも新しい讚美歌と、おもしろいお話をもつてまわります。

うして萬國日曜學課をこくわかりやすく語りますので獨り日曜學校兒童用教科書として
結構なるばかりでなく、日曜學校家庭部用として最も適當だとの評判を受けました。
私は招待さへして下さいますならば、どんな所へでも喜んでまゐりませう、うして私の
された使命を忠實にはたすでございませう。

大阪市南區日本橋筋壹丁目
大阪傳道館内

發行所 日曜學校研究會

基督教につき、尙ほ詳しく知らんと欲する人は、左記傳道館及び教會、若くば最寄
最寄の教會、傳道館、講義所等に於て、隨意御聞きなされたし。

- | | |
|--------------|----------|
| 大阪市南區日本橋筋壹丁目 | 大阪傳道館 |
| 同 下寺町四丁目 | 下寺町傳道館 |
| 同 難波元町五丁目 | 難波傳道館 |
| 同 東關谷町夕日橋北詰東 | 夕日橋傳道館 |
| 同 松屋町九之助橋南 | ベテル福音傳道館 |
| 同北區會根崎上三交番所前 | 福音傳道館 |

A-24

兵庫縣淡路國洲本町七丁目

洲本基督教會

同

福良町納屋町

福良基督教會

同

由良町紺屋町

由良基督教會

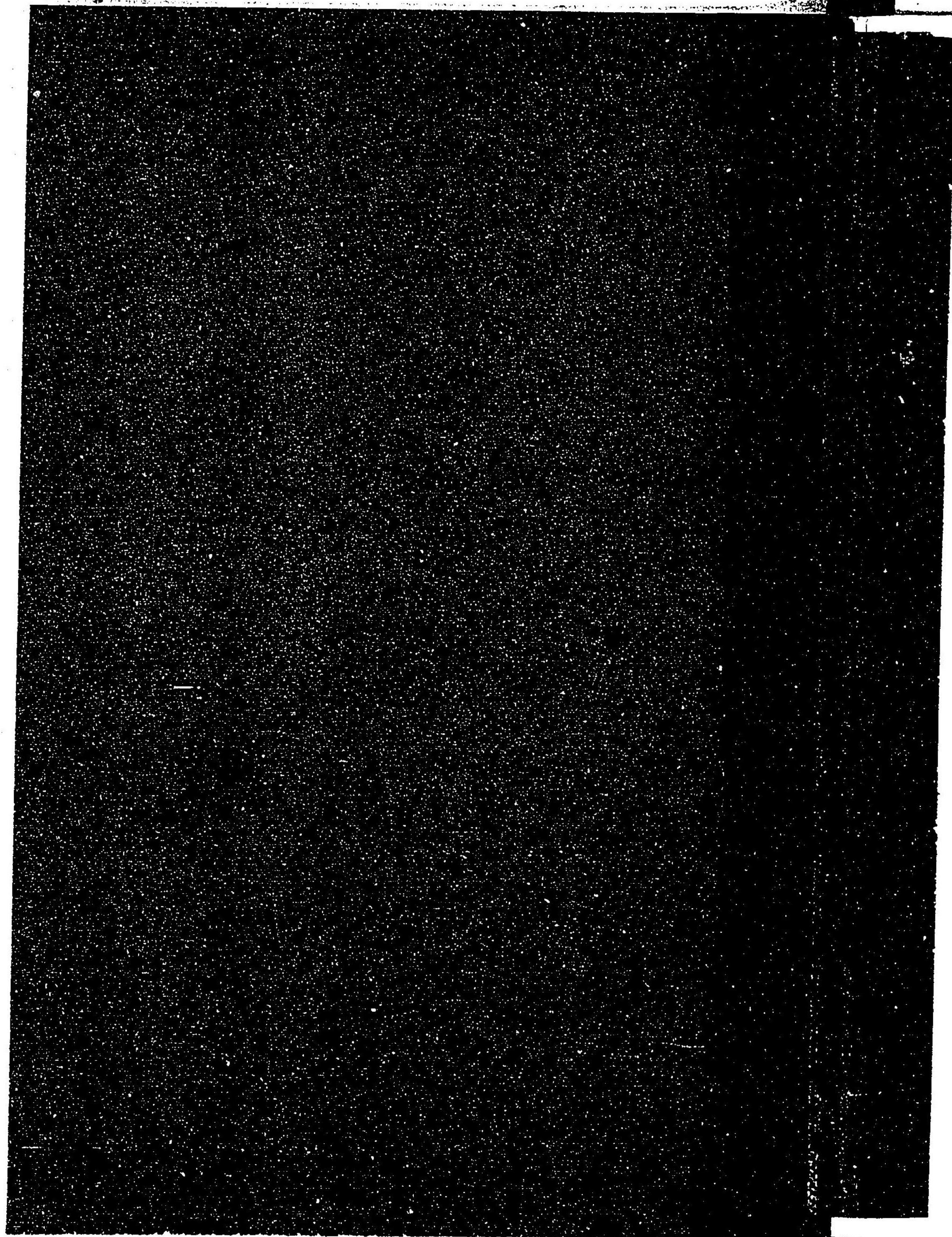
同

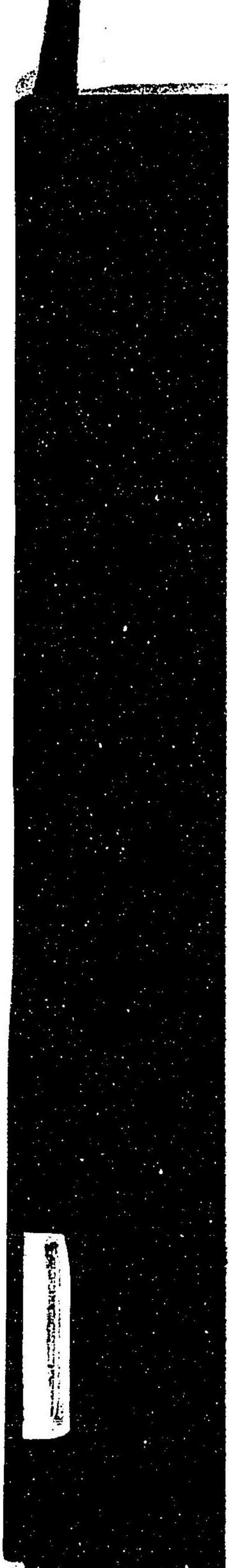
播磨國明石町相生町

明石傳道館

神戸市多聞通り

神戸基督教傳道館





1

心の鏡

空閑知鷺治

国立国会図書館

020640-000-4

特49-14

心の鏡

空閑知鷺治 / 著

M41

ABI-0456



